

『その恋、百万ドル』

著：坂井朱生

ill：六芦かえで

「はっきり言わないとわからないのか？ ……邪魔だ」

低い声にきっぱりと言われてしまえば、和沙はこれ以上手をだせなくなる。

「どうせおちつけば、嫌ってほど手伝ってもらうことになる。おまえをお坊っちゃま扱いする気はないからな、せいぜい今のうちに、ゆっくり休んでおけ」

呆れきった忍坂の声が、耳に痛い。

「邪魔をして、すまなかった」

キッチンにはさほど面積をとっておらず、男二人が並ぶとさすがに狭い。手伝えないならこれ以上邪魔はするまいと和沙がキッチンから離れようとする、「待て」と、背中に忍坂から声がかかった。

「コーヒーと紅茶、どっちがいい」

「……？」

驚いてふり向いた和沙に、忍坂が小さく肩を竦める。

「手伝おうって気持ちだけは、ありがたくもらっとくよ。食後の茶ぐらい飲むだろう、どっちがいいんだ」

唐突に示された思いやりに、和沙は驚いて目を瞬かせた。役立たずどころか足をひっぱるばかりだったのに、いいのだろうか。

黙りこんだまま彼を凝(ぎょう)視(し)していると、忍坂が苛(いら)ついた様子で「どっちだ」と訊ねてくる。

「それでは、コーヒーを」

「ブラック？ ミルクと砂糖は」

子どもだと思われたくない。ただでさえ手の掛かる面倒な相手だと認識されてしまっていて、これ以上呆れられたくなかった。

背伸びをして、ブラックと答えようかと考え、けれどやはり正直に希望を伝えた。

「甘めにしてくれ」

飲めもしないブラックを頼んで、嫌そうな顔をしたらまた忍坂に怒られてしまう。なにより、せっかく淹(い)れてもらったものを無駄にしたくなかった。

「わかった。カウンターにでも座ってろ。それとも部屋に戻るか？」

首を振り、和沙はキッチンカウンターの一角に座った。ここからなら、忍坂が作業をしている姿が見える。

長身の体軀をなめらかに動かして、忍坂が慣れた動作で片づけをすませていく。流れるような動きはあざやかだ。手脚も長いのだが、動きに無駄もなく乱雑でもないせいか、とても優雅に映る。意識しているわけではないのに、つい、見入ってしまう。

ずいぶん、慣れているようだった。彼なら一人きりになっても、和沙のように途方にくれることなどあり得ないだろう。

自分があの域に辿(たど)りつけるまで、いったいどのくらいの時間がかかることやら。考えると気が重くなってくる。

それにしても、忍坂の態度が軟化した理由はなんだったのだろう。

これ以上嫌われるような事態は避けたいと手伝いを申しではしたが、結局邪魔をしただけだったのだ。

まともな会話をするまえから嫌われて、役立たずなのに感謝をされた。

他人の気持ちというのは、ずいぶんと難解だ。数学のような公式も、絶対的な答えもない。外国語のテキストのように翻訳してくれる誰かもいない。引くべき辞書もない。

経験を蓄積し比較して、対処方法を探るしかなさそうだが、和沙には他のなにより経験が絶対的に不足している。

とりあえず今は、忍坂の行動の一つ一つをしっかりと記憶していくしかなさそうだ。

「どうもありがとう」

香ばしい匂いのするコーヒーをなみなみと注いだマグカップが、和沙のまえに置かれた。

「礼は言えるんだな」

皮肉めいた言葉ほどには、口調が陰しくなかった。

「あたりまえだろう？ なにかしてもらったら必ず感謝して礼を伝えなさいと、父がいつも言っていた」

「なるほどな。それにしても、はじめて来たわりにはずいぶん日本語が上手いんだな」

忍坂が、用件以外の話をしてくれた。あまりにも驚いて、和沙はふたたび言葉を失った。

「どうした？ でっかい目見開いて。なんか言いたくない事情でもあるなら、無理に言わなくたっていいぞ」

和沙は慌てて首を振り、そうではないと答えた。

「事情などない。日本語は、家でもずっと使っていたんだ」

忍坂が話を切りあげようとした気配を察して、和沙は急いで口を開いた。

嬉しい。ほんの少しでも歩みよってくれたようで、たまらなく嬉しかった。

「変わった教育方針だな。なんか中途半端つつ一か」

「たぶん、父は僕を日本で暮らせようと、早いうちから考えていたんだと思う」

テレビはともかく映画のビデオすら、可能なかぎり日本語吹きかえ版が用意されていたし、中には父の趣味で、古い日本映画もあった。

「だったらガキのころからここで住ませりゃよかったんだ。わざわざ育てから放りこむなんて、面倒なことしたもんだな」

「それは、僕をどうするか、ハッキリ決まっていなかったからだろう」

「それで、結局放りだされたのか」

「放りだされてなどいない」

忍坂の口調には嘲(あざけ)るようなニュアンスがあって、和沙は瞬間的にムッと顔を強張らせた。

「俺みたいな得体の知れない男だけつけて、あとは好きにしろってんだからな。放りだされたんじゃないやなんだってんだ」

得体が知れないなんて、自分で宣言することではないだろう。たしかに忍坂はそれまで和沙の周囲にいたような温かい人たちとは違うかもしれないが、それでも父が選んだ男だ。

父には父の考えがあって、忍坂を選んだ。和沙は父を信頼しているし、なにより和

沙自身、忍坂とこのまま離れたくない。

きっと親切になってみたり、急に冷たくなったりするせいだ。彼の感情が和沙にはまったく掴めなくて狼狽(うろた)えたり腹をたてたり、振りまわされっぱなしなのが悔しいからだ。

せめて、誤解だけでも解いておきたい。和沙は決して、忍坂に不満など抱いてないのだと、どうしたら伝えられるだろう。

今まで和沙の周囲には、忍坂のように初対面から不機嫌だったり、こちらの感情を誤解して気にいらぬなどと決めつけたりする人間はいなかった。

悪いことをすれば容赦なく叱(しか)られはしたが、皆大抵は親切で、いつも温かく接してくれていた。

忍坂は、そんなに僕が嫌いなのか。

思いは、すぐに口をついてでた。

「忍坂は、そんなに僕と暮らしたくないのか」

「少なくとも楽しくはないな」

即答されて、ぐさりと胸に突きささる。

悔しい。……悔しい、悔しい。

「残念だが、僕はもう決めた。なにがあっても絶対、クビになどしてやらない」

いけない。こんなことを言ったら、忍坂を怒らせてしまうだけだ。和解して謝ろうと思っていたくせに、どうして喧嘩を売のような真似をしてしまったんだろう。

自分の浅(せん)薄(はく)さ加減に、和沙は唇を切れてしまいそうなほど噛みしめた。それでも、瞳は忍坂から逸(そ)らさない。

忍坂は和沙の視線を受けとめると、小さく鼻を鳴らした。

「そりゃ結構。でも俺が辞めるって降りることもできるんだぜ？」

挑発的に、忍坂はにやりと笑ってみせた。

「明日から路頭に迷ってみるか？ メシをつくるどころか、一人じゃろくに外にも出られないようなお坊ちゃんだが、あんまり突っぱるんじゃねえよ」

「——ツ」

ぐっ、と和沙は言葉に詰まった。忍坂の言うのはまったく正しい。

この国で、誰も知りあいのいない場所で暮らしていこうとすれば、否(いや)応(おう)なく忍坂の手を借りるしかない。

どうして、こうなってしまうんだろう。

忍坂と揉めたいわけではないのについ喧嘩を売のようなことを言ってしまうと、和沙は言ったそばから後悔していた。

最初に躓(つまず)いてしまってから、どんどん悪い方向へとばかり進んでしまう。

今のは完全に和沙が悪い。

忍坂が自分を歓迎していないことくらい、初対面からわかっていたことだ。

少しでも状況を改善しようと思うなら、こんなふうによ(やす)々(やす)と挑発に乗るのではなくて、自分は彼と上手くやっていきたいのだと伝えればいいのに。

和沙は拳(こぶし)をきゅっと握(にぎ)りしめた。

「辞める……気、なのか」

本文 p60～66 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>